

高齢者大学文芸部 10月歌会

早朝を日輪拝しそのあととはわが影法師追ふて帰り
く 茂田 巖
宮苑の銀杏あまた落ちし道拾ふ人なく避けて通り
ぬ 北村 玉恵
痛む膝動かせば少し柔らぎて自転車こぎゆくコス
モスの道 今坂 文子
わが歩みに些か早き青信号渡りきりたるあとの安
らぎ 山代 静子
次々とわが身に起ることごとの九十の坂はきびし
きものよ 荒木 幸
早天に実りし小豆の粒ほそくもげばほろほろ畑に
こぼるる 中津 ツユ
追憶は限りもあらず覚めし夜半九十五年の過ぎ越
し辿る 氏岡 百枝
秋晴に箆笥に眠る着物干す仕舞ひ置きたし曾孫太
るまで 安永ウメ子
間引き菜の朝漬けうまいと食べる夫その一言の小
さき幸せ 山田 弘子
今日の日も無事に終はるか夫とわれ農にいそしむ
収穫の秋 河津 豊子

万句の里俳句会 10月句会

コスモスの見渡す限り海となる 加藤 妙子
小さき木にもてあます程柿成らせ 北村 妙子
金銀に揺れる芒に溺れけり 平山 邦子
神沼に先陣の鴨抱かれをり 宮本 雅子
移りゆく日々の山野に吾亦紅 林 まつ子
山里の宮居はすでに薄紅葉 富田 幸子
夜長にも話はずきぬ旅の宿 茨木 幸子
肩ふれて紫式部こぼれ落つ 緒方 玲
一枝をぐつと伸ばして松手入 松永 久子
里山の灯の美はしき十三夜 中路 郁子
朝陽や蒼天更にすみ渡る 高木 陽子
人が来てたちまち鴨の引きあげし 鋤本 トミ

肥後狂句桜会 10月例会

よか相場 山芋掘りの辞められん 太田 雄三
一周忌まだ犯人の捕まらん 小川 繁美
難しき躰に手焼く反抗期 須藤 新生
何んだろか開けちゃ見られん福袋 狩野 本六
たつぷりと老後のために貯めました 田中 孝幸

泗水短歌会 10月詠草

虫の声 失業の身にしみわたる 荒木 玄海
一周忌 読経の上がる事故現場 安武 二山
たつぷりと貰ってみたい月給日 窪田 明德
よか相場 競り場で子牛なでよらす 水谷 ミネ
難しき親は復縁望どるが 高倉 新米
虫の声 散歩コースの賑やかさ 藤由 藤紫
何んだろか 橋のたもとに人だかり 米岡 末房
それぞれに虫に鳴き声個性あり長く引くものすぐ
止めるもの 大島 ひと
夜々部屋に鳴くすす虫におやすみと言葉かけたり
独りのわれは 長尾はるみ
夕映えに染まる曾孫のペーパーカー押しつつ歌えり
夕焼け小焼け 平嶋きくえ
遣水のすかさず土に滲み入るを木々よろこぶか亡
夫に重ぬる 古田のぶ子
思い煩う何なけれども目覚めては遂に眠れぬ齡と
なりぬ 増田久美子
久かたの雨は土の香漂わせ狭庭の萩のくれない散
らす 吉安 永子

せせらぎ俳句会 10月例会

汲み置きしバケツに名月恍々と 藤本アツ子
コスモス原この俣こゝに眠りたし 坂本まつえ
幼等が声掛けて行く田の案山子 服部 静子
身に沁むや老へば萩散ることさへも 村山 数恵
松手入迷へるときの空鋏 五丁 義昭
幼等とどんぐりころころ茜雲 寺本 和子
稲刈機白鷺五羽を従へて 内村 泊虹
老の身にあまりに厳し虎落笛 内村 鈴子
刈田道一本橋を渡りもし 吉岡 民子
実柘榴の弾けぬもまた台風禍 藤本 邦治
あけびの実ぱかつとひらいて種見えた

七城短歌会 10月詠草

荒くたましき 赤子ばピユンてなんぎゃつた 左 党
どんこんならん 金は作らじや子ば作る 美 由
こそばいさ力の足らんマッサージ 水 光
どんこんならん 秋と言うのに夏日和 乗 佛
どんこんならん やっぱ別居がええて言う 三 水
ゴミ袋破つて捨てたラブレター 千 笑
どんこんならん 何人女泣かすどか 三 代
荒くたましかあれでん娘ん子だろうか 江 彩
ゴミ袋透けて見えよる不精振り 英 坊

旭志文芸俳句会 10月詠草

庭畑に腰手ぬぐいで草を取る明日から検査入院の
夫 岩崎 照代
柔らかき月の光に迎えられ友と集える聖なる部屋
に 水田紗陽子
取り草も生芥も埋めし敵の上爆薬めきし種子を蒔
きゆく 下川 つぎ
コスモスの花咲き揃う河川敷季節違えし向日葵ま
でも 岩下ミツエ
無農薬の菜畑は虫に滅ぼされ空箆提げて戻る夕道
高木 精

肥後狂句水笑会 10月例会

どんこんならん 着替えのさ中入って来る 寛 ペ
どんこんならん 彼氏は親が探さにゃん 好 茶
こそばいさ お世事上手も程のある 五 女